

名古屋葵大学

40号

総合科学研究所だより

Research Institute of Integrated Sciences and Humanities

巻頭言

総合科学研究所主任 山中 なつみ
YAMANAKA Natsumi

令和6年8月に厚生労働省より国民健康・栄養調査（令和4年11～12月実施）の結果が公表されました。例年は調査実施の翌年に結果が公表されますが、今回は新型コロナウイルス感染症の影響により約1年遅れの公表となり、さらに令和2年と3年は調査自体が中止とされていました。国民健康・栄養調査は、昭和20年に連合国軍司令部の指示で実施された一般住民の栄養調査が始まりとされています。その後、時代により調査の名称や目的、調査項目・方法が変化しつつも、途絶えることなく継続されてきました。日本人の健康・栄養状態、生活習慣の変化を客観的に示す統計資料であり、さまざまな研究・調査において常に引用されるデータとなっています。このような歴史ある重要な調査が3年に及んで影響を受けたことから、新型コロナウイルス感染症の流行が行政に与えた影響の大きさを理解することができます。令和4年の調査では、

コロナ禍前後における生活習慣等の変化に関する調査項目も追加されました。「体重が増えた」あるいは「運動日数が減った」と回答した人の割合は、20歳以上男女ともに「体重が減った」「運動日数が増えた」と回答した割合の各々約2倍で、巣ごもり生活の影響がうかがえました。

一方、厚生労働省が示した健康増進のための基本方針「健康日本21（第三次）」（令和6～17年度）では、取り組みのひとつとして「社会環境の質の向上」が挙げられました。コロナ禍では制限されていた人と人とのつながり、人と社会とのつながりが心身の健康増進において重要であり、様々な機関が連携して「自然に健康になれる社会環境づくり」を推進することが求められています。本学でコロナ禍前に実施されてきた「開かれた地域貢献事業」は、今年度すべて再開することができました。地域の高齢者、子どもたち、一般の方々への学びの場、ふれあいの場を提供する活動は、まさに「社会環境の質の向上」に寄与するものです。名古屋葵大学が目指す共創社会への貢献にもつながるこれらの活動が、今後も継続、発展していくことを願います。

「開かれた地域貢献事業」令和6年度事業報告

家政学部生活環境学科：間宮貴代子
医療科学部理学療法学科：加藤芳司・松林義人
短期大学部生活学科：石崎智恵莉・武岡さおり・森屋裕治
総合科学研究所員：山田勝洋

健康科学部健康栄養学科：片山直美・辻 愛・山中なつみ
児童教育学部児童教育学科：渋谷 寿・吉川直志・坪井眞里子
短期大学部保育学科：河合玲子・鈴木美枝子・田中弘美・山本麻美
名古屋女子大学同窓会「春光会」：千葉史子・高田麻紀

本研究所が推進する「開かれた地域貢献事業」は年々発展を続け、今年で18年目となりました。地域の公共施設である名古屋市の瑞穂児童館、瑞穂区役所、瑞穂保健センターとの連携事業も順調に発展してまいりました。また、今年度は、新型コロナウイルス感染症防止のため、しばらく事業を中止していた瑞穂保健センターとの共催事業につきましても、5年ぶりに実施されました。今後も、ますますさまざまな事業の展開が期待されています。

瑞穂児童館との交流事業は、保育、教育、栄養関係で7講座と、児童館クリスマスイベントで5つの企画を行いました。クリスマスイベントは、従来の自由な参加型が復活し、午前、午後の一日をかけて各企画が開催されました。瑞穂区役所との連携事業では、昨

年度に続き、働く女性、地域の子育て世帯の支援を目的に「子どもと朝ごはんレシピ瑞穂区ナンバー1決定戦！2024」の最終審査会が本学の調理室で開かれました。瑞穂保健センターとの交流事業では、5つの講座が催されました。

これらはいずれも、家政学部生活環境学科、健康科学部健康栄養学科、医療科学部理学療法学科、児童教育学部児童教育学科、短期大学部生活学科、同学部保育学科の教員と学生の有志、春光会、および総合科学研究所の教職員の協力により実施できました。

今後とも、地域の方々と触れ合う場面を多く作り、地域社会に貢献できるように取り組んでまいります。

(文責：河合玲子)



クリスマスイベント
ゲームやダンスを楽しみましょう



ヒノキの楽器
「トーンタング」をつくろう



「若返りきらきらセミナー」
体づくりの基本を知りましょう



子どもと朝ごはんレシピ瑞穂区ナンバー1
決定戦！2024最終審査会

機関研究

「創立者越原春子および女子教育に関する研究」

遠山佳治代・河合玲子・三宅元子・吉川直志

本研究は、令和4年度～6年度の3年間（第8期）を期間としており、本年度はその3年目（最終年）です。各研究成果を踏まえ、全体的に考察する方向で進んでいます。

この一年では、小山静子・石岡学編『男女共学の成立』をはじめ、小山静子の一連の研究成果『戦後教育のジェンダー秩序』『良妻賢母という規範』『高等女学校と女性の近代』、および伊藤公雄・樹村みのり・國信潤子『女性学・男性学』を取り上げて、本学の共学化を見据えて、ジェンダー観の検討を進めました。

また、永年勤続の尾崎学術情報センター長補佐の協力を得て、本学の図書館の変遷について聞き取り調査を実施しました。そして、今後も『学園七〇年史 春嵐』（昭和六〇年）以降の本学の教育内容の変遷が、記録として残るよう、努めていきたいと考えています。

最後に、「創立者越原春子および女子教育に関する研究」は、来年度から始まる「創立者越原春子および本学園が歩んできた教育に関する研究」へ引き継いでいくことになりました。

（文責：遠山佳治）

機関研究

「大学における効果的な授業法の研究10」

～本学の教育に適した効果的なインストラクショナルデザインに関する研究～

吉川直志代・加藤芳司・河合玲子・佐々木基裕・鈴木美枝子・田中弘美・内藤紘一・橋本侑美・羽澄直子・服部幹雄

「本学教育に適したインストラクショナルデザイン（ID）を活用した授業改善方法」をテーマとして研究をスタートさせました。時代や環境の変化に対応できる効果的な授業改善のサイクルの確立を目指します。今年度の研究目標は2つ。IDによる授業改善の方法の理解と、本学における授業改善の現状把握です。松田岳士・根本敦子・鈴木克明編著「大学授業改善とインストラクショナルデザイン」を輪読し、ID理論を基にした授業改善の流れを理解しました。学生の現状（入口）と学修目標（出口）の分析を明確にした上で評

価方法を検討することが、授業改善に必要なことであるという共通理解ができました。研究メンバーからは、授業改善の現状と必要性について報告していただき、ID理論による本学での授業改善に向けての方向を知ることができました。GIGAスクール、AIの進歩、本学では共学化へと入口・出口が変化する中での授業改善のサイクル確立に向けて次年度以降の研究につなげます。

（文責：吉川直志）

機関研究

「幼児教育で育みたい資質・能力に関する研究Ⅱ」

幼児保育研究会

今年度の研究テーマである「幼稚園におけるプロジェクト型保育の可能性に関する研究Ⅱ」の中で、今年度は、子ども達の体力向上を大きな目標として取り組んでいます。特に、活動のテーマを「パワフル」として、様々なプロジェクトに大きく反映展開してきました。音楽会プロジェクトでは、5歳児が、皆で選んだ曲の中で、様々な楽器を使った合奏を披露しました。優しい心地よい音楽と曲

に合わせたパワフルで元気いっぱいの表現の中で、子ども達にとっては、音楽の楽しさを十分に味わう経験になったように思われます。今後も、子ども達の主体的な遊びを引き出しながら、どのようにパワフルな展開につながるかを探り、その具体的方法を求めて取り組みたいと考えています。

（文責：森岡とき子）

機関研究

「食と健康に関する研究」

高橋哲也代・小椋郁夫・駒田格知・幼児保育研究会

本研究会は、引き続きヒトの健康を支える「食生活のあり方」をライフステージに従って栄養の摂り方や食品の開発について追求すると共に、多岐にわたる情報を精査して発信することで、学術の振興および地域社会への貢献に寄与することを目的として研究を進めています。ライフステージごとの研究として主たるものである子どもを対象とした研究では、すでに作成した食育教材としての紙芝居に続く第2弾として今年度は我々ヒトと動物における歯と食べ方を比較したフリップ紙芝居が完成間近となりました。すでに明らか

にしてきた絵本の分析も違ったアプローチで分析を行っているところです。また今年度の主な研究の1つとして、昨年度、外部の学術誌に明らかにしたアユの脂肪酸分析による地域食材としての価値の研究をさらに深めているところです。これまで時間をかけてサンプルを蓄積しながら準備してきましたが、その成分分析を行いましたので、近々結果をまとめる計画です。

（文責：高橋哲也）

プロジェクト研究

「理学療法学科学生の学業成績向上プログラム開発のための予備的研究」
～女子大学生における生活習慣と学業成績との関連～

駒形純也代、石田和人、内藤紘一、長谷川隆史、玉木 徹、坂本祐太（健康科学大学）

睡眠時間や運動などの生活習慣が学業成績に密接に関連していることが報告されています。このため、私たちは理学療法学科の学生を対象に、生活習慣が学修意欲や学業成績に及ぼす影響を明らかにするため、アンケート調査を実施しました。本調査には約70名の学生が参加し、現在、解析作業を進めています。

アンケートの結果、過去1か月以内に何らかの要因で十分な睡眠を確保できなかったと回答した学生が半数を超え、多くの学生が

睡眠に課題を抱えていることが分かりました。これらの睡眠状態が学修意欲や学業成績にどのような影響を与えているか、さらに調査する必要があります。また、今後はウェアラブルデバイスを活用して睡眠の質や運動量を測定し、アンケート結果と合わせて、生活習慣が学習意欲や学業成績に及ぼす影響を包括的に検討する予定です。引き続き、学生の学力向上に寄与する情報を提供できるよう、研究を進めていきます。（文責：駒形純也）

プロジェクト研究

「鉱石ホットパック（乾熱法）の温熱効果作用に関する基礎的研究」
～他のホットパックとの違いの検討～

荻原久佳代・岡田 誠・松林義人・森下勝行（城西国際大学）・横田 龍（葵会仙台病院）

本研究は、理学療法手技の一つ、物理療法の代表的治療法である、ホットパックに焦点を当て進めています。その中から、治療機器の一つとして、鉱石を使ったホットパックの効果検証を行いました。今年度は、第1段階として皮膚表面からどの程度の深さを標的組織とできるのかを模擬生体（ファントム）を用いて、その深達度と、温度上昇の時間的変化を検証しました。

結果、表面の温度変化は、8～10℃、深さ2cm部位では、3～4℃であり、深部に行くほど最高温度に達する時間は遅くなり

ました。また、ホットパック試行中の20分間、温度が下降することではなく、特に深部ではホットパック除去後も温度が上昇する傾向が見られました。ハイドロコレータパックを使用して皮膚温の変化を計測した先行研究では、開始後11分で温度変化が4.1℃と最大となり、その後下降したという結果と異なり、鉱石ホットパックには、より高い保温効果と持続力があることが示唆されます。今後は、他のホットパックとの違いや実際の生体による皮膚温度の変化を検証し、報告させていただきます。（文責：荻原久佳）

令和7年度プロジェクト研究

「鉱石ホットパック（乾熱法）の温熱効果に関する基礎的研究」

～他のホットパックとの比較及び、生体への適応～

荻原久佳代・岡田 誠・松林義人・森下勝行（城西国際大学）・横田 龍（葵会仙台病院）

本研究は、鉱石を用いたホットパックの効果を検証する継続研究です。第1段階では、模擬生体（ファントム）を用いて、温熱の深達度と温度上昇の時間的変化を調査しました。そこで、今回は、第2段階としてこの結果が鉱石ホットパック特有の結果かどうかを検証します。具体的には、一般的なハイドロコレータパックや簡易的な電子レンジホットパックを使用し、ファントム

での温度変化を比較します。さらに、実際の生体に適応した際の皮膚温度変化をそれぞれのホットパックで測定し、その違いを報告します。

これらの結果を講義資料や学生の演習資料として活用できることを期待して検証していきます（倫理委員会での審査中）。

（文責：荻原久佳）

「生成 AI を活用した大学教員の業務効率化と教育支援の実証研究」

～看護学科業務を対象としたプロンプトの開発と評価～

中神克之代・大竹美紀・土屋裕美・松田麗子

本研究は、生成AIを活用し、大学教員の業務効率化および教育支援を目的としています。今年度は、看護学科における業務に特化した ChatGPT 用プロンプトを開発・評価し、その実用化を目指します。

近年、国内外において生成 AI の教育・業務支援への活用が進んでいますが、大学特有の業務に適応したプロンプトの実証研究は十分に行われていません。本研究では、演習計画の作成、文献

レビューの支援、議事録の作成、メール返信文の作成などを対象に、効果的なプロンプトの開発を進めます。さらに、開発したプロンプトの適用効果を評価し、その精度向上を図るとともに、教育・業務における実践的な活用方法を検討します。

本研究を通じて、教員の業務効率化の促進を目指します。

（文責：中神克之）

「児童・思春期病棟での精神看護学実習における学びとその効果」

鈴木雪乃代・新井信之・山本通栄

児童・思春期精神科では、初診待機となる対象者が一定数存在し、その要因として、児童思春期精神医療に知見を有する専門職種の少なさがあります。看護学生への児童・思春期精神科医療への関心を高めることで、将来の従事者数の増加に貢献できる可能性があるものの、児童・思春期病棟での実習の学習効果に対する知見はありません。愛知県内の児童・思春期病棟を有する精神科

病院はわずか2か所であり、そのうちの1つである医療法人仁精会三河病院で、本学は精神看護学実習を行っております。本研究では、精神看護学実習を行った看護学生および勤務する看護師に対する質問紙調査、統計的分析を行うことで、児童・思春期病棟での実習の学習効果を明らかにしたいと考えています（倫理委員会での審査中）。（文責：鈴木雪乃）

総合科学研究所主催 令和6年度大学講演会(令和6年9月13日)

AI、ChatGPT の最新状況

講師 ● 東中竜一郎 先生 [名古屋大学大学院情報学研究科知能システム学専攻 教授]

総合科学研究所主催の令和6年度大学講演会では、昨年度からの継続である「AI、ChatGPT の最新状況」をテーマに、名古屋大学大学院情報学研究科の東中竜一郎先生を講師にお迎えしました。

講演では、令和5年度講演内容を振り返りながら、この1年間で進化したAI技術の最新動向が解説されました。特にChatGPTの進化と他の生成AIとの競争が激化する中で、人間のアイデアを発展させるためにAIが有用である点が示されました。また、対話モデル研究の現状、具体的な実用例、さらには教育・ビジネスにおける活用可能性についても具体例を交えながら説明され、AI技術

がもたらす新たな可能性が示されました。

参加者は教職員120名で、アンケートでは「分かりやすく理解が深まった」「最新の情報を学べた」「興味・関心のあるテーマでよかった」「AIの実用例が参考になった」等の感想が寄せられました。AI技術の進展を大学教育にどのように活用するか、引き続き学びを深める必要性が示されました。

(文責：中神克之)



開かれた地域貢献事業

瑞穂保健センターとの交流事業「懐かしい歌を歌いましょう」

今回はじめて「きらきらセミナー」の講座にボランティア参加させていただきました。これまで小学校の児童をはじめ、子ども達と接する機会は多くありましたが、地域の方々と一緒に音楽活動するのははじめてで、ドキドキしながらの始まりでした。わらべうたの「おちやをのみに」から始まって、皆さんがこやかに輪遊びに参加される姿をみて緊張もほぐれました。特に印象に残ったのは、「静かな湖畔」の輪唱で、ステキなカノンになったことです。音と音の重なりで、全員の歌が一つに響きになった時は、音楽の響きで参加者の心をつなぐことができることを実感しました。また、音楽を全身で感じ取り活動することの大切さを再認識でき、こうした、地域の方との交流を通して、音楽の力でできる事がたくさんあると感じました。自分達の小さな歩みが人と人との繋がりにっていくこと、歌を通して交流する貴重な機会となりました。4月からは教員として社会に貢献できるよう、活かしていきたいと思います。

(文学部児童教育学科4年)



みんなで輪になってリズム遊びや輪唱を楽しみました

瑞穂児童館との交流事業「みんなでクリスマス」

クリスマスイベントの中で、私は靴下のマラカスとジャンボ松ぼっくりのツリーの製作に、ボランティアとして参加しました。マラカスづくりは乳幼児対象でしたので、声を掛けても最初は子どもに警戒されてしまいました。しかし、形が出来上がっていくにつれて笑顔を見せてくれたり、出来上がったマラカスを振ってみせてくれたりしたので、とても嬉しかったです。

ツリーづくりは、ビーズを付けるのが難しいかなと予想していましたが、子どもの小さな手にはちょうど良かったようで、器用に配色を工夫して、飾りを付けていました。取り組んでいる子どもに、「どこにポンドを付けたか当ててね」と、クイズ形式で声を掛けたり、「ここでしょ」と答えてくれました。「当たり」と答えると、その子は笑顔で「ヤッター」と、嬉しさを体いっぱい表現してくれました。保護者の方や子どもたちの楽しそうな様子に「参加してよかった」と思い、保育者になりたい気持ちが強まりました。

子どもの製作に、どこまでサポートすればよいか、年齢に合わせて判断することは難しかったですが、今回の経験は、保育士のすごさを実感したボランティアでした。または是非参加したいです。

(短期大学部保育学科第三部1年)

子ども達に笑顔で積極的に話しかける
学生達の姿が見られました



今年度(令和6年度)運営委員

委員長 河合 玲子 KAWAI Reiko (短期大学部)	坂本 麗香 SAKAMOTO Reika (家政学部)	中神 克之 NAKAGAMI Katsuyuki (健康科学部)
堀部 要子 HORIBE Yoko (児童教育学部)	松林 義人 MATSUBAYASHI Yoshito (医療科学部)	

研究所メンバー

所長 渋谷 寿 SHIBUYA Hisashi	顧問 河村 瑞江 KAWAMURA Mizue	主任 山中 なつみ YAMANAKA Natsumi
所員 山田 勝洋 YAMADA Katsuhiko	職員 牧野 弘実 MAKINO Hiromi	

編集後記

総合科学研究所だより40号をお届けします。ご執筆いただきました皆様に感謝申し上げます。令和6年度事業報告においては、コロナ禍で中止されていた「若返りきらきらセミナー」が5年ぶりに再開されたことが報告されており、医療科学部との連携で新しい介護予防講座が実施されました。また、大学講演会では昨年度から継続して名古屋大学の東中先生のお話を伺い、対話システムの進歩に驚くとともに、教育・研究の様々な場面でChatGPTを活用するきっかけにいただけたのではないのでしょうか。来年度も有益な大学講演会を企画してまいります。今後とも総合科学研究所の活動にご協力をお願いいたします。

(文責：山中なつみ)